

じてしまった。

これが彼をして中央政界に進出して、日中両国の共存共栄こそ世界平和への貢献であるとの主張をしていた施策を実現せしめる機会を失った、国家的一大損失であると思う。

鬼に角、その実力を發揮する機会を失ったことは惜しみてもなお余りある。

しかし、顧みて幸せなことは、引揚者団体全国連合会の舵取り幹部は次々と他界され、たった一人、過去の長い歴史的運動に携わった結城氏が健在であることは、引揚者団体として掛け替えのない彼の存在であること。彼の行くところ、こばむ者誰があるうか、どなたにもものおじすることなく、堂々と正論を吐く強烈な雄弁は老齡をみせない。

(引揚者団体山形県連合会)

理事 渡部 一満

龍爪をあとにしての記

山形県 羽柴 芳太郎

序にかえて

昭和二十年九月中頃は、拉古^{ラゴ}收容所にいたが、收容所前の道路を隊伍正しく日本軍の兵士達が、ソ連兵士に引率されて通るのを見送ったことがあった。バラ線の柵をはさんで交わされた言葉は、「お先に日本内地に帰ります、皆さんも元気でネ、さようなら」とお互いの健康を祈りつつ手を振りながら一時の別れを惜しんだものでした。

兵隊さんだから先に帰れるのだと、ひとり納得していましたが、シベリア連行などとは誰ひとり口にする者はありませんでした。が、実のところみんなシベリア行き兵隊さん達だったのです。

ソ満国境近くに配置された開拓団は、純然たる国境警護の任務を負わされ、食糧増産と日本軍への食糧供

給を義務づけられたも同然でした。日本国の政策としては成る程そうであるべきだったとは考えられません。最後の土壇場になって、我々開拓団は軍から見捨てられたのだという感じがしてなりません。

非戦闘員である我々を護るべきはずの日本軍が最初からの予定の作戦だったのだということを知られた時は、本当にがっかりしました。なんで軍関係者や、その家族達だけを優先して早く退避させたのだったのでしょうか、今更愚痴を並べても仕方ありませんが、彼等の無情さには怒りさえ覚える一人です。

開拓地の男達は殆ど召集されてシベリアに送られ抑留労働を強制され、非常な苦労働儀をされたことはよく耳にしましたが、留守をあずかった開拓団員の妻や老幼婦女子の逃避行の苦難は、シベリア抑留者の苦勞に劣らざる筆舌に尽くし難いものが数多くあったことを、誰が語り継いでくれるのかと考える時、これは文章にして書き残すべきものと思い、当時のことを再度思い浮かべ、夜中に眼をこすりながらも書き綴ったのがこの一文です。

はじめに

昭和二十九年秋、盛岡市において、第五次、第六次開拓団等の引揚情況についての合同調査会があり、私も厚生省の要請により出席したが、調査の進展はびっくりするほど、お粗末そのものでした。後日の参考になればと思い、引揚げ帰国してから早や十年の歳月は流れようとしていたが、昔の追憶をたどり、日記式に書いてみた。日時については多少のずれはあるにせよ、たいがいのことは五十歩百歩のことと考え、ノートから抜粋したものです。

他人のことなどは構う暇さえなく、我が身一つが一番大切な時の私の歩いた難民収容所拉古までの記録で、龍爪開拓団員および家族たち避難民の大主流は、大体キランスキー製材所までは同じ行動だったように思われるが、その後はいくらかの分派的行動になっていったように記憶している。

龍爪在滿国民学校での半年間

林口駅、上兵庫飯駅、龍爪駅、向陽駅と農村地区内に四つの鉄道の駅がある村なんて、日本内地はおろ

か全満にもあるかしらと言っていたこの地、龍爪の村
でした。

王道楽土の建設に挺身すること十年、満州国林口県
龍爪開拓団も、日一日と隆盛の足どりも堅実に建設は
進行していた。村内には全満にも誇る林口種馬場をは
じめ、林口畜産学校、龍爪緬羊牧場、養鶏孵卵場等の、
他の開拓地には例のない一大施設の集団地でもあつ
た。

昭和十九年、日本内地は大東亜戦争の渦中にあり、
それこそ非常時体制の時、北満の地特にこの龍爪はま
さにこの世の楽土であった。召集兵などはあまりなく
て、ただ青年学校修了生徒が数人ずつ毎年の行事のよ
うに現地軍隊等に入隊するのがあるくらいであった。

昭和二十年四月二十九日の天長節の式典も、例によ
って型の通りに始められた。教育勅語、宣戦の大詔、
青少年学徒に賜わりたる詔書が奉読され、新任の校長
である私は国民学校生徒、青年学校生徒、在郷軍人、
婦人会、その他村のおもだった方々等、式典参加者多
数の前でお定まりの諭告や訓辞をなし、和田章^{ワタケシロウ}蔵龍

爪村村長は村民を代表して天長の佳節を祝福すると共
に、皇軍将兵の労苦を思い、皆と共に増産に励むこと
を、声を大にして誓い合つたのでした。今次戦争は、
必勝は絶対的なものと信じきつての言葉だった。

学校の生徒が連日のように農作業に勤勞奉仕に狩り
出されることになったのは六月に入ってからだった。
毎日毎日湯のような汗を流しながら出征兵士、応召家
族の農作業の手伝いに行ったものである。

牡丹江中学校の男生徒は、夏休みを返上して、約百
人くらい龍爪の地に派遣され、わがなつかしの龍爪小
学校を宿舍として奉仕作業に連日汗を流してくれまし
た。七月も末になったころ、ソ満国境方面の参謀格の
方が龍爪にも立ち寄つたが、緊迫せるソ満国境のこと
は一言も漏らさなかつたようだ。中学生徒の奉仕隊は
八月六日頃そそくさと引揚げて牡丹江に帰って行きま
した。

またその頃龍爪緬羊牧場視察のため、長谷川場長の
所に二人連れの偉そうな方が来訪し、上席の中村直敬^{ナオキ}
先生と二人で話のお相手をし、一献差し上げたりした

覚えがある。後で聞いたことだが、この一人は元馬賊の親玉だったとかで、ずい分太った体の持ち主だった。首の太さが頭の囲りと同じくらいもあって、人品風格もなるほど馬賊の親玉にふさわしいふしが窺われ、当方としては内心おだやかでなく、いささか威圧感さえ感じられたのでした。こんな平和な理想郷に、突然爆弾が投下されようとは誰が想像したであつたらうか。

苦難の毎日

昭和二十年八月八日午前三時頃、夜明けの静けさを破り、私たち学校住宅の硝子戸は、ピンピンピンビーンと物凄い音響をたて、入口の戸など半ば外れてしまった。一瞬にして村中の者は眼が覚めたものと思われる。スワ匪賊の来襲かと思ひ、電気を消し屋外の様子を小一時間もうかがってみたが何事もなかった。危機感はあるので、すぐさま外に飛び出せないまま隣りの角国俊顕先生との連絡もつかず、状況判断に時は流れ、物すごい長時間あせりにあせった。いよいよ夜が明けた。朝の井戸端会議がすぐ開かれ、さまざま憶測がなされた。しかし、皆目見当はつかないし、

またつくはずもなかった。朝食もそこそこに出勤、やがて職員も揃った。生徒は爆弾の破片など拾って学校へ持って来た。見れば確かにソ連製のものだ、と書いてある文字から推定された。学校の裏手の山際の麦畑に投下され、五、六メートル四方もの大穴があいて物は吹き飛ばされメチャメチャである。五、六か所もそんな大穴があつたという。ソ連の奴ら、演習の帰りがけの駄賃にそこらに適当にバラ撒いて行つたのだろう、俺たちは演習の帰り駄賃を喰らつただぐらいう話になり、昨夜の爆弾さわぎも遂に、そんな所に落ちついてしまい、あまり気にも止めず平常通りの授業に専念することにした。

八月九日、開拓団本部よりの指令により、日本人の部落長会議や在郷軍人幹部会が持たれた。①事態は急迫している、②屋根に青草や木の枝をのせ擬装工作をしろ、③防空壕を修理して万一に備えること、……誠に緊急でしかも寝耳に水のような指示が村全体に伝えられた。林口方面からは満人苦力たちの大移動が始まり、長蛇の列をなし、私の住宅前の道路を牡丹江方面

へと通って行ったが、あまり気にはとめず、また彼等に問いかけて聞いてみるほどのこともなかったので、多分どこかの工事現場からの移動ぐらいに考えていたものだった。

八月十日、今日も朝から苦力たちの移動、長蛇の列は昨日とさして変わらない。むしろ昨日よりは大勢のよさを感じさえもたれた。少しは不安にもなったが、まさか国境線の防備が破れたとは少しも思っても見なかった。もやもやのうち今日も屋根に草や木の枝などを載せ、気やすめの擬装作業の一日は終わった。生徒の勤勞奉仕作業はもはや取り止めにせざるを得なくなった。夜、開拓花嫁女塾の主任千田先生を訪ね、女塾生などといういろいろな話をし合った。緊急時における開拓乙女の心構えなどについて、自分なりの考えを披露などして帰って来た。ずい分堅苦しい日本精神に凝り固まっていたものだと思う。如何なる困苦にあおうとも、日本女性として辱しめを受けるような場合とか緊急事態にあった時は、断乎として立派な行動をとってほしいなどと言ってきたが、意気の盛んなところを示した

ものだった。尤も花嫁女塾の講師でもあったので。

八月十一日、男と名のつく者は一人残らず団本部前集合の伝令が飛んで来た。まさに非常召集の感があった。①在郷軍人としての服装のこと、②米三合くらいは持参のこと、③日本帝国軍人としての奉公袋を忘れないこと、④そして各戸配備の鉄砲も忘れずに。午前十時頃、中隊編成を終わり、上席教諭角国俊頭先生を中隊長に指名、私は中隊副官の役にまわった。ただちに林口駅警備の任務命令が出されたので、龍爪駅に出て見たが、入ってくる列車はどれもみな超満員列車であり、溢れてこぼれんばかりの日本人避難民ばかりの山盛り列車であった。仕方なく引き返し、徒歩で林口街に向けてわが角国中隊は発進することにした。上兵庫部落をすぎたところ、ソ連機が林口駅を爆撃するのが手にとるように見えた。機は頭上に飛来、角国中隊長はすぐ散開の大号令を発した。皆の者は湿地といわず、川の中といわず、南瓜畑やトウキビ畑の中にバラバラと散らばって身をかくした。爆撃こそされなかったが、何とも言えない恐ろしい気持だ。南瓜の葉っぱに穴を

あけ、小穴から大空の飛行機の行方を見守った。林口の街に着いた時はもう日も暮れかかっていた。本物の日本兵もいるはずだったが、ちらほら見られる程度の数だった。何回となく飛来するソ連機には身動きも出せず、機銃掃射の弾丸の雨、爆弾の見舞いを受け、一歩も前進することはできない。林口駅は完全にやられていた。県公署からの命令など待ったが、どこで誰がどうするのか皆目見当もつかず、真暗やみの道を進み、やつのことで県公署にたどりつくことができた。満

・ 鮮人は盛んに民家から物を盗み出しているが、取り締まる何らのきめてもないありさま、雨が降って来た。協議が始まり新たな任務を受けた頃は、夜中の十時も過ぎていただろうか、麻山マザンや湖水別コシノベツ、古城鎮コウジヨウジンの方角は、もう天をもこがすほどの大火災がおこっていた。やがて林口街旧市街の山の手、日本軍官舎方面からも火の手が上がり、次第に燃えひろがり、向かい側にあるこの林口県公署附近でさえ熱いような感じがするほどでした。すばらしい、恐ろしいほどの火の海と化した。日本国内でいかなる大火といえども比較にならないす

ご味があった。こんなことでは到底この少人数で林口の街は護り切れたものではないと、誰いうともなく話が始まり、物凄い土砂降りの雨の中を夜中の一時頃になってやつと、なつかしの龍爪リウソウへと引き返すことにしたのだった。

八月十二日、真暗やみの中、声をたよりに銃を杖にしながら帰りついたのが朝の三時頃かと思われる。女塾に寄って飯を食わしてもらったが、寒くてどうにもならない。昨日からろくな飯を食っていないのだ。団本部事務所に行つて四斗樽をおちあけて酒をヒシヤクであおつてみたが少しも効きめがなかった。ただ酒の匂いをするだけだった。夜明けを待つて婦女子は駄車に乗せ、南の方、楚山ソウザン方面まで退去することにしたようだった。村長である和田章蔵氏はまだ龍爪の地を墳墓の地ときめて、一歩も後退や避難の気持さえ見せなかった。満人の盗人は横行の限りを尽くしていたが、どうにも防御の手だてはなく、彼等の思いのまま、ただ見て見ぬ振りをするより致し方がなかった。一晩中真暗な本部の事務室で、何の為す術もなくすごした。

牡丹江市から龍爪の地まで命からがらやつと戻つて来た女学生の娘さん達も、自分の家までいけずに本部に立往生、どこの誰さんかは名前すら分らないが、みんな元氣を出すためのおの酒など飲んでみたが誰一人として酔払つてフラフラするような者はいなかった。

八月十三日、林口方面ではすでにソ連軍が侵入し、戦軍が今にも押しよせてくるだろうとの情報さえ伝わつて来た。満軍は陸統りくとうとして退去してくるありさまだ。満軍は龍爪神社のある高台に散開して火線を構成したのには全くおどろいた。本当に眼の前なので手に取るように見えるのだ。戦場の真只中と一変したわけである。和田村長とここで強行談判し、やつとのことです避難命令を彼の口から発せしめたのだ。お陰で私は避難の総指揮をとるよう命ぜられた。総指揮を命ぜられてはみたものの命令する相手は殆んど何処かへ行つてしまつて、今は誰もいない。ただ団本部の周辺に二、三十人ぐらいの日本人がいるだけで、誰がいるのかなどは全く定かでない。村長宅の前の道路わきに立つて、避難していく他開拓団の方々にご苦労さん、ご苦労さ

んを連発している自分の姿を発見した時は、みんなどこへ行つてしまつたのか皆目わからないありさまだ。村長は雨のシヨボ降る中に一人立ち、我が家に火を放ち焼いてしまった。「アアさっぱりした。いい気持ちだ」と言つていた。礼服のモーニングなど良い品物は、常日頃親しくしていた満人の村長にくれてやつた。もらつた満人村長は大変喜んで帰つて行つた。か。いつまでもこんな所においても仕方がないので、本部の倉庫から真新しい晒木綿や、ナツバ服を引つ張り出し着用した。龍爪の地を後にしたのが午前十時頃だつたかと思われる。戦争に負けたなどとはさらさら思はず、いたつて呑気に、その辺まで行つたらまた戻つて来るさ、ぐらいに思つて。今思うと、龍爪を退去した者の一番最後の一人であつたような気がする。続々と避難民は退去して長蛇の列は続いた。村境をすぎる頃、和田村長は涙を流し北の方龍爪の地を見やつていた姿が今も念頭から消え去らない。楚山まで行つたら日本軍陣地があるから、その後はなんとかなるぞと村長は言う。何とかなると思い、頼みをこの一言に託し

て行つたが、頼みの部隊はもぬけのから、一人の兵隊の影すらなく物一つ残つてはいなかった。がっかりしたのは私一人だけではなかった。夜は満人屯長の家にたむろした。妙な飯を御馳走になった。粟の入った白い米の飯だった。屯長にしてみれば最高級のご馳走をしてくれたものであろう。電灯のつく村からランプの家に、そして畳の上からオンドルの上にと生活は一変した。背中ばかりが熱くなり、ろくにぬむれなかつたが、屯長のもてなしで兎に角一夜はあけた。もちろん布団などないのは当然だった。

八月十四日、やつと家族に追いついたと思つたら別の人たちだった。今日も一日長蛇の列に混じつて、黙々とあてもなく歩きつづけた。途中の道端には、米、砂糖、酒、ウイスキー、煙草など山をなすほど捨てられてあつたので、思い思いに拾つてはポケットやリュックにねじり込んだ。世界に誇る関東軍が、この大事な時に丸裸の一般住民を振り捨てて退却するとは夢にも考えていなかった。軍が一人もいないのには一同ずい分がっかりもしたし、また大変憤慨もした。某

満人屯長の家に立ち寄つたら豚肉を御馳走してくれた。そこを去るに及んで、屯長はオロオロと泣きながら、村長和田氏に泣きついたが、和田氏は何やら一言言いふくめ、彼の手を振り切つてそこを出発した。前方の群衆は、仙道方面からソ連軍がやつて来たというので引き返して来る一団であつた。このころになると馬車が故障をおこし、前進するのには大変邪魔物となつて来た。なるべく余計な物は捨てて貴重品だけを持つようになつた。朝鮮人は我々と反対の方向に馬車を引いてもどつて行くので不思議に思つた。良く考えれば、これは日本人が捨てたり残して来た着物や家財道具、行李などを拾いにゆくのであつた。いかにもなあと思つた。

八月十五日、ある山の中、ソ連軍が来たら鉄砲で一発で仕止めてやろうと、草原の中で身構えてみたが、よく見るとそれらしい者は一人も現れず、みな日本人の避難民ばかりであつた。すべての持物を放り捨てて此処が最後と決心らしいものをしてみたが思い直し、死ぬのはまだ早いとまた荷物を集めてリュックに押入

れ、皆の者と相談のしなおしをした。前進は不可能につき、右側の大湿地帯を渡り山に入れということだった。いよいよ山中に入って逃げるより仕方がないとのことだった。この時、三日目にしてやっと家族（妻美・長女信子・次女令子・三女光枝・長男正士）とめぐり会うことができた。妻は長男の正士と光枝の二人を負んぶして、信子と令子の二人を両手に握り歩かせていた。荷物は全くなく、子供だけが大事な荷物の全体であった。二人の赤ん坊を背負い、二人の幼児を歩かせて来る妻の姿、あどけなく母について来る子供の姿を見つけた時、なんとも言いようのない熱い涙がポロポロとほおを流れ、一言ものどから声が出なかつた。ただ信子や令子の頭をなでてやるのが父親として精一杯であった。聞けば十四日の夜、ソ連軍の戦車に追いまわされて子供たちは全くの素足で逃げまわったという。新しいズックをはかせてよこしたのに、見ればみんな素足であった。荷物の大半は昨夜の事件で、どこかにみんなひっぱられてしまったのだという。なんとも哀れなたとえようのない姿であった。いよいよ意を

決して湿地を渡りはじめることにした。頃は丁度夕陽が西山に傾きかけはじめ空を赤くそめていた。小高い山一つ越えて谷間に出たころはもう真暗やみであった。藪の中で宿ることにした。疲労のため子供たちはすぐに草原にねころんでしまった。和田村長は他人のリュックを借りて背負い、一晚中足ふみをして蚊咬の来襲を防いだという。蚊咬の来襲も相当なものであったので殆ど眠れたものではなかつた。翌朝までの時間の長かつたこと。仙洞方面からは戦車の轟音が聞こえるし、空にはドンドンという爆弾の音が絶え間なく一晩中、何ともおそろしい夜だったがどうにもならないのでその夜は藪の中ですごした。藪の中でお産をした婦人もおつたが、今後のことを考えるとやはりどうにもならないのでその場で絞め殺して藪の中に置いて来たという方もいた。その産婦も翌朝からは皆と共にまた歩かねばならないのだ。お産をするのに脱脂綿のいちぎりあつたわけでもあるまい。犬や豚っこにも劣るありさまであつたろう。

八月十六日、今日も山の中、山越えの林をぬけた。

こんどは兎に角腹がすいてどうにもならなくなった。

なんとかしようと思つたが何もない。仕方なく生のトウキビをかじつた。この世に生を受けてこの方^た三十四年、初めての食べ物だった。二、三軒ある部落でお昼にした。馬鈴薯やトウキビを煮て食べた。その時借りた洗面器はそのままだいて持つて来た。これが命を支える唯一のナベとなつたのである。加藤某という人から馬を一頭もらつたので非常に助かつた。吠^{カズ}を二枚つなぎ合わせて馬の背中に振り分けにし、その中に信子と令子を一人ずつ左右に入れて歩いたので、皆の衆から名案だとほめられ独り得意になつたものだった。子供は疲れ切つているためか、馬の背の吠の中で屈託なくよく眠つていた。三人の子供を乗せたこともあつた。令子と光枝を乗せると長女の信子はけなげにも歩いてくれた。すまないような涙の出る思い出の一つだった。

八月十七日、山の中をずい分歩いたものだ。道ばたに家はあつても食料になるものは何一つなく、全くの空家同然だった。藪の中にも普通であつた。山

形部落の近くの柳田氏などは、この頃から自決の顔色が見え出したので励ましあいながら一緒に歩いたが、彼の一家はすぐ落伍しがちであつた。その彼の一家はいつの間にか隊列から姿を消してしまつたのだ。その後はどこでどこまで来られたのかわからない。

八月十八日、露人部落の手前の山で野宿をすることにした。前方に大河があり、夕方おそいので渡河は無理だという。野宿でも子供たちはよく眠つてくれた。夜露で体中はビショビショであつた。夜明けを待つてみんなは出発した。やがて大きな牡丹江河に差しかけた。河の水は先日の雨で相当増水し濁流が勢いよく流れている様子だった。鉄橋の真中に敷いてある巾三十七センチくらいの板の上を馬をひいて渡るので、橋の途中で馬もろとも河に転落して命を落とした方も何人かあつたが、さいわい私は無事渡ることができた。この頃から体にシラミがわき出したので、河向こうの原っぱに出て洗濯をしたり、シラミとりをしたりして一休みすることにした。間もなく大きな製材所に到着、ここで一泊ということになり、炊き出しをしてもらい

大きなオニギリを食べた。誠に美味しい味わいであり皆ホッとした様子であった。龍爪小学校の生徒の大半はここまで殆ど無事に避難して来たようであった。誰かが米軍のピラを拾って来て、日本はやっぱり負けたのだというが誰一人として信ずるものはなかった。小学四年生の某君が私にむかって、「校長先生はウソつきだ、日本は絶対負けないと言ったじゃないか、もう負けたそうだよ、うそつきだなあ」と言われた時は、全く冷汗の出る思いで返事の言葉も出なかった。

八月十九日、照りつける夏の陽さしを真上に受けながらの逃避行、山また山、川また川、余りのどが渴いたので藪の中の川の水をガブガブと手で掬って飲んだ。これで一息つき三十メートルも上流に向かって歩いたところ、大きな土左衛門（死人）が浮いていたのにはゾッとしたが、飲んだ水は吐き出せなかった。

八月二十日、小さな部落を二つほど通り抜けると営林署の跡のような所にたどりついた。一同はここで一夜の宿をとることにしたが、遅く到着した者の部屋は馬小屋の跡しか残されていなかった。馬糞の臭いのす

る所でも、ぐっすりと眠ることができたのは疲労の極限だったからだろう。雨が降り出し相当強く降りつづいた。食べるものは殆ど採りつくされ、どこにも何もみつけることはできなかった。夜中に武装解除の指令が出て、みんな銃器弾薬を手放して身軽になった。荒縄でしばった鉄砲や日本刀をソ連兵が来て何処へか持ち去った。朝になると雨が降っていてもまた当てもなく出発だ。行く先の部落には、もう赤旗がひらめいていた。赤旗を見るとなんだか恐ろしいような気がしたが、皆と一緒の列にまじって、前進しなければどうにもならないので、前進を続けざるを得なかった。

八月二十一日、また河を渡らねばならなかった。鉄線の渡してある急な流れの河だった。雨が降る夕方である。休みなしの雨降りだった。一同は途方にくれた。仕方なく楢の原木の下で焚き火をしながら寝ることにした。子供たちはゴロ寝させた。ボタボタと大きな雫が特別大きく感ずる。ぬれた着物を乾かしながらの楢の木の下での惨めな一夜であった。部落を出る時に盗んで来た去年のトウキビを焚き火であぶりながら食べた

のが悪い結果をもたらした。下痢のはじまりだった。

八月二十二日、暑い日であったが今日も生芋をかじりながら青豆をかんでの行軍だったので乳飲み子は見る見るうちに細り、次ぎ次ぎに死んでいきました。他人の顔が驚くほどやせこけているのをみておどろくばかりでした。逃げてゆく方向は誰も教えてくれませんでした。羊の群が先頭の一頭について移動する如く、黙って、ぞろぞろと死の行進のようにあてもなく歩き続けた。

八月二十三日、夏の陽は遠慮なく避難民の頭上から照りつけていた。路傍に一人の老人が腰を下ろして休んでいた。知人の父親のようでもあったが定かではない。「じいさん俺たちは先に行っているから、後でゆつくり来なさい」と声をかけてその場を通りすぎた。翌日私達一行は行き先先の危険を心配して昨日の道を逆戻りすることにした。その日も暑い夏の太陽は容赦なく照りつけていた。みんな汗だくの態であった。昼すぎ頃、昨日のじいさんがまだ休んでいるのを発見した。「じいさんまだここにいたのか」と奇って見たら、

じいさんはもう横になって死んでいるではないか。目、耳、鼻、口と所かまわず丸丸と太った蛆がじいさんの顔を我がもの顔に、所せましと動き回っているのである。見るに見かねて、野の草花を手折り眼前に供え、顔を草で覆い南無阿弥陀仏を唱えながら手を合わせて来た。あわれ七十近い老人との最後の別れであった。

八月二十四日、今日も夜明けと共に歩かねばならぬのだ。みんなからはぐれることが一番つらかった。むし暑い日になりそうなき模様だ。涙と鼻水と一緒にして泣き叫びながら母親を探し求める女の子がいた。見れば知人の娘だ。母親はどうしたと尋ねたら側の人と言う。我が身が一番大切な時だから足手まといになるものは何でも捨てていくのだと言って夜の明け切らない中に、この子を置き去りにして東の方に行ったとのこと。終戦後何年か経ってから、この子は肉親探しのため日本へやって来た。父親はシベリアから無事帰還していたので、奇しくも親子の対面、再会が出来たが母親はこのことを知ったかどうか知らないが、生きて日本へ帰っていたとしても、この娘に会わず顔はな

い筈だ。

八月二十五日、行く先先の畑で食べられる作物はないものかと探したが、遅い者のためには何一つ残されていない毎日だった。夏の陽は容赦なく避難民を頭から照らしつづけていた。途中の道端には何人もの死人が横たわっていた。あまり見苦しく可哀想なので草原の中へ押しやって来た者もある。雨降る中を何時間か進んでキランスキーという大きな製材所のある所になった。どりつき、ここで宿泊ということになった。このころ、長男の正士は栄養失調の絶頂であった。満一歳の乳飲み子正士は夜明けをまたずに、母の腕に抱かれながら一命を失った。髪の毛と爪を切り、私はポケットに入れた。家の裏手に蜜蜂の箱があったので、少し窮屈ではあったがそれに納棺し、裏の山に埋めた。千田先生が持っていたお経の本を借り、読経してやったが声にならなかった。がなんとかまとめて南無阿弥陀仏を唱えて成仏させた。角国、青木、千田先生等みんなが焼香合掌してくれた。涙はとめどもなく溢れる中、正士の墓前と別れて来た。全く後ろがみをはかれる思いだ

った。朝起きて見ると、親のない子供が親を探しているのが数多く見られた。親は親でも我が身一つが一番大事なものだから、子供が眠っている間に早立ちをしてしまったのだろう。誰かが連れて来てくれるかと思つての仕業かも知れないが、全く困つたものでした。私は長男が死んだので、肩の荷物が軽くなつたと、から元氣を出し、皆を励まし、今日もまたあてもなく前進である。小さなよそ様の子供を見ると、死んだ我が子の姿が目にはちらついてどうにもならない日が幾日も続いた。この頃青木キミ先生は、朝鮮の兄の所まで単身でいきたいから、団体行動から離れたいと申し出たので、致し方なく、兔に角無事内地へ帰国されることを切に念願し期待をかけて一行と別れることにした。

八月二十六日、キランスキー製材所におけるの生活は大きな思い出であった。朝陽屯から避難して来られた大先輩の青山永次郎校長一家、そして鈴木恭介先生夫妻、森山和五郎氏老夫婦らと会うことができたが、お互い話しあう言葉に苦しむ心境だった。もはや団体行動による避難行動は許されない状況下にあると噂が

噂を生んでいた。前進して横道河子に出れば、男子は皆家族の者と引き離され、ロシア行きだという。屯長諸氏が協議を重ねても、これからの対策として最良の方法はなかなか出るはずもなかった。ある人の情報によれば、男は皆強制的にシベリア行き、女子は一人残らず使える者はソ連兵の慰安所送りだろうという大変なショックで前進することへの不安はますます増大するばかりであった。困り果て、子供をモンペの紐で絞め殺した者も幾人かあった。子供を殺さねばならないまでに追いつめられた親の心、ずい分切迫した立場の親の集まりであった。和田村長はここで一大決心をせまられ、開口一番「ことここに至っては団体行動はもう駄目だ。開拓団を解散して各人自由行動に移るよりほかに道はない。各人は一日でも早く祖国日本に帰り、祖国の再建に役立つてもらいたいと思う」と提案。一同は止むなく賛成、ここで衆議一決した。和田章蔵村長涙の挨拶であった。時に土砂降りの夜中十時頃であったろうか。翌朝その旨を一同に向かって宣言、龍爪開拓団並びに龍爪開拓協同組合は完全に解散した。こ

こに一同は自由の身とはなったものの、さてこれから先が問題なのである。どのようにして日本まで帰りつくことができるかに迷ってしまった。

以上は龍爪開拓団という大きな集団としての避難行動である。以下は個人的な体験記として記述いたします。

桃源郷を求めて

八月二十六日和田村長が出した解散宣言により、各人はこれからの行動について、各自、自主的に考えねばならなかった。いろいろと都合のよい情報をキャッチし、最良の方策を立てなければならなかった。一山越えれば牡丹江市に出られる桃源郷があるという情報を得たので、みんなは喜んだものだが、誰一人としてその桃源郷ゆきを決行する者はいなかった。其処にゆけば越冬はもう大丈夫だというので、羽柴、角国一家各四人、細田計雄一家七人、岡田十郎一家三人、丸田一家三人の二十一人の一団は、険しい人跡未踏の山道を丸一日がかりで越すことにした。楽しい夢を描きながらの行進だった。遂にたどり着くことができたのだ

が、もう日はとつぷりと暮れていたの、最初に見つけた空家に入り込み一夜を明かすことにした。暗くて一寸先も見えないほどの雨の夜を迎えていた。日本兵の残党も何人かいることが翌日になってわかった。翌日からは少量ながら食料にもありついた。支那釜を利用して風呂もわかして入ることができた。残兵が持つて来てくれた牛の肉の水たきを食べさせてもらったが、味もなにもない、うまいものではなかった。満鮮人が時折訪ねて来て、塩やマツチを持ってきてくれ慰問していったが、実はソ連軍のスパイであったことが捕まつてからわかった。長途の避難行軍による疲労困憊はその極に達し、あわせて栄養不足や下痢などで、一団は全く動くことができなくなっていたので、しばらくこの地でゆつくり休養し、できれば越冬し来春に備える考えはみな同じのようであった。月日のすぎていくことなどはどうでもよい、考える力などはもうなくなっていた。越冬準備の話などで、毎日を無意味に送っていた。戦争のことなどはもう忘れかけていたかのように、平和な生活をのみ求めていた。敵国の真只

中にいることすら考えずに。九月十五日頃かと思うが、小さな峠を越して隣の部落へ移動する話が始まり、午後二時ごろ出発することになった。平和な毎日を送って二週間くらいなるので、行進などはバラバラで長い列をなしていた。ところが突如、銃の音がして列は分断され、十二、三人から成る山狩部隊に襲われていたことがわかった。ソ・満・鮮人からなる混成部隊だった。命には危害を加えなかった。後方から追っかけて来る妻子に向かつて、早く逃げろ、と大声で叫び、後退させたまでは良かったがこれが今生の別れになるうとは誰が知ろう。露ほども考えていなかった。私は捕まつたがみんなに頼んで夕方おそくまで探し回ったけれども、妻子の姿は遂に見つけることができなかつた。どこまで退却したのかわからない。岡田十郎一家は自決（拳銃所持）していたことが細田氏により確認されただけだった。私は捕まりどうにもならない。妻子四人は行方不明として、今はあきらめるように説得されて失意の状態であった。私は以後、牡丹江に一団と共に行進、拉古收容所に送られることになった。妻

子はこの山中でさ迷いつつも生きのびていたことは事実である。後に知ることになったが、妻は某屯長の世話で某警察官と再婚し二男一女の母となり牡丹江市郊外八キロの農村に現存している、という。

現住所 中国牡丹江市北安公社豊収大隊

氏名 日本名(羽柴 美) 中国名なし

妻子を中国に残して

私は内地引揚げ後、県庁や法務局、裁判所を訪ね、妻子の死亡認定を取りつけ、戸籍上の手続きは一切手落ちなくすませ、三年後、妻の妹と再婚し一男一女の親となった。復職もし中学教師として忙しい毎日を送っていた。昭和三十三年には、十三回忌にも当たるので妻子五人分の合同葬儀もした。ところが三十八年頃中国より一通の手紙が届けられた時はびっくり仰天、確かに妻美が生きているのであった。以後何回か通信が続けられた。昭和五十年一月、一時帰りの許可があり、日本へ来ることができた。長女信子、次女令子、三女光枝は次々に風土病で死んでいったことが妻の口から確かめることが出来た。妻は再婚して三人の子が

あり、長男は小隊長、次男は大型機の運転士、長女は学校教員をしており、長男の孫も二人もいるので、中国に帰り余生を楽しむという。半年間の日本内地生活を惜しみつつ、羽田より北京へと飛んで行った。今は日本での生活より幸せであればよいと祈るのみである。

某の後は音信不通であり、最近風の便りにきけば十年ほど前に成人病らしき病にたおれて、牡丹江市の病院で亡くなったとのこと。一時帰国した折妻子五人分の位牌を持たしてやろうとしたが、要らないと言って残していったので仏間にそのまま安置してある。

拉古收容所から内地帰還まで

九月の中旬(二十一年)牡丹江市郊外の山奥で捕らえられ、拉古收容所に送られて来ました。大勢の日本人、知人、友人がおりましたのでホッとしましたが、自分の居所がなくて困ってしまいました。本部という所を訪ねたら朝陽屯の团长古幡景美先生フルハタキミやら青山永次郎校長、鈴木恭介先生等その他教え子等数多くの顔があり非常に心強く思った。收容所には開拓団の方々がほと

んどであった。その数三千人とも五千人ともいわれ
いた。その総元締め役が朝陽屯の村長古幡先生であ
った。毎日の生活の一切を指揮して大変な仕事であ
った。団長古幡先生は私を見るや、君、よいところに
来た、俺の手伝いをしてくれ、ということでの日か
ら本部でお手伝いすることになった。人員の点検、把
握、食糧の配給、諸連絡事項の伝達など忙しい毎日だ
った。

九月も中旬になると朝夕はめっきり寒さが骨身に泌
みて来るので、こんなところで越冬することになると
この先非常な不安があり、大勢の人は一日も早く南下
して、暖かい奉天の方に行きたいと希望していた。所
長（ソ連軍）の許可が出て牡丹江の駅から新京に向か
って無蓋列車で行くことになった。ハルピンで途中下
車を命ぜられて降りてはみたが、治安や食料事情、宿
舎の状況など予想以上に思わしくなかったため、三週
間くらいで新京まで南下することにした。新京に着い
た時はもう十一月になっていて相当に寒い朝だった。
在滿教務部の方がいるという仮事務所を尋ねあて、当

座の生活資金として六百円ぐらいいただき、割当てら
れた興安大路裏通りの在滿教務部の官舎に落ちつくこ
とができた。学校関係の者ばかり二十人が同居するこ
とになった。生活のためには働かねばならなかったの
で、各々仕事を探し毎日をがんばった。私は床屋の職
人に化けて失敗、一日で解雇、マントウ売り、煙草を
拾い紙巻煙草にして街頭に出て立売りをしたり、人殺
しや強盗こそしなかったが、コソ泥などは何度もやっ
た。お金になることなら何でもやって見たが、結果は
あまり上出来ではなく、最後は豆腐製造元に一週間ほ
ど通い続け、やっと豆腐小売をさせてもらった。一斗
缶を天秤棒でかつぎ朝昼夕と定刻に町に出るのであ
る。毎日面白いように売れた。町角でメガホンを手に
して大声で叫んでいると、みんな顔を出して買ってこ
れた。時には二階の窓から籠を下げ、金を入れて買っ
てくれる方もあり同じ道を毎日定刻に回るので、顔な
じみの方も多くなり、大変なすかりました。二月と言
えば新京あたりはまことに寒い、腰に下げた手拭はい
つも棒鱈のようにカチカチに凍っていた。新京での越

冬は実に苦しく厳しかった。日本人は五万人も死ぬだろうと予想し埋葬する穴を秋のうちに掘って待っていたともいわれていた。毎日のように緑園の墓地に向けて死人が運ばれて行く葬列を見せられた。この外に行李詰めにされた凍死体など何度か見かけた。この頃シラムが蔓延し、大変困惑した。毎日シラム退治をしたが間に合わず最後は、パンツでも洗面器で煮るのが最良の方法だった。発疹チフスが流行し、自分も歳末の一か月間は夢中で暮らした。此の間、同居中の六、七人が亡くなり何処にどのように埋葬されたかは殆ど覚えていない。年あらたまつて元旦の朝を迎えたので、兎に角みんな起き上がり、日の出を拝むことにした。東の方を向いて手を合わせた時は一同の眼からは涙が出ていた。まだ生きていたことへの感謝、感激の涙であつたらう。嬉しかったこと此の上もない。ソ連の兵隊が何度かやって来て「ダワイ、ダワイ」と言い金目の物はなんでも掻っ払って行ったので殆どなくなり、みんな着のままの生活だった。中共軍が入って来た、共産軍が入城だ、吉林軍が来たといつては軍票

の交換が忙しい。我々は交換するほどのお金は持っていないから良いものの軍票が変わるので生活はまことに不安定なものだった。中共、共産、吉林、と軍が入れかわるたびに旗をかかけて、歓迎のため歩道に並んではみたが、彼等の装備などは余り頼もしいほどのものではなかった。宿舎の直ぐ前に建っている石橋ビルをはさんで中共両軍の戦闘が始まり流れ弾丸で死んだ若い娘さんがいたり、外れ弾丸が部屋の中まで飛んできて部屋を一周し鴨居にあたって止まったり、まるで戦場そのものの時もあり、生きた心地はなかった。四月に入り十九歳から四十五歳までの単身者が集められ、勤労奉仕隊の編成がなされ、その中隊長に任命された。鼻ひげをはやし、中折帽をかぶって行った姿が目にとまり区長の目をひいたらしい。厭だと言つても駄目だった。大衆が許さなかつたので引き受けることにした。東遼河^{ヒカリョウカ}の鉄橋が爆破されたので木橋を造り、日本人輸送の汽車を通すのだという。一か月ほどの間、貨物列車を改造した現場の宿舎として建設作業に従事した。第三小隊長の富樫^{トカシ}君はよく隊員を掌握し働いて

くれた。今でも私は感謝している。またこの仕事が終わるころ新京飛行場の修理、拡張工事がまっていた。

三個中隊約五百人の日僑奉仕隊員が従事した。主客転倒の時であったので、中隊長の私も、何かのはずみで天秤棒のようなもので満人監督からぶんなぐられた。

両手が後ろに暫くの間まわらなかったこともある。ある隊員は顔がお多福のようにはれあがつて暫く休養をとったこともあった。日給五十円は一律に支給されたが、煙草一箱が一番安いので十円、卵が一十円というので、とてもぜいたくは出来ない。ポロポロの高染めしは毎日与えられるものの、栄養的には充分とはいえない食事だった。たまには豚肉汁も出たが、それでも死なずに、九月十五日頃工事は完了したが朝五時起床、作業現場到着作業開始七時、そして作業終わりが夕方七時、宿舎に帰り寝る時は十時という重労働だったことを思うと感無量のものがある。十九日に内地に送還するという指令が出たので一回は嬉し涙を流して喜んだものだ。十八日には工事完了竣工式、式後祝賀会があるのでという案内を受けた。祝賀会場を見ると

御馳走はテーブルの上に山と出されていた。が式後すぐ帰ることにした、毒酒でも飲まされて殺されたら元も子もなくなるし、内地の土もふめなくなると思ひ、皆と相談したら、そうだ、そんな懇親祝賀の酒など飲まなくともよいということになり、ぞろぞろと、式後帰って来た。十九日の日はみぞれ混りの冷たい雨降りだった。九時頃内地送還の指令が出たと、連絡を受けた。午後二時までに南新京駅に集合するように隊員一同に伝えて回った。アンペラを傘にして、病人をかばいながら駅に向かつての行進は仮装行列だか何だかわからない妙な姿だった。待つこと久し夜中の十一時になつてやつと台車が到着、暗やみの中で側板を取りつけ、雨降る中、みんなを乗せ発車したのが十二時をすぎたかも知れない。毛布や布団を頭の上のせて雨をよけての発車だった。途中夜中に何度か匪襲にあいながらも、遂にコロ島に着いたのが十月の半ば頃と思われる。汽車の中で亡くなった方は、汽車の進行中に車外に投げ捨てられた方もあり、あわれな場面も何度も見た。汽車が夜中に停車すると必ず金品の徴発が来る。

幾らかのお金を握せると、のろのろと動き出す。汽

笛が鳴ってまた停車する、野原の向こうから匪賊らしき暴民の群が月明かりに見ることが出来た。みんな線路から石ころを拾いあげ投げつけてやっとなぎ退したこともある。鉄棒、くさり、鎌などをもっていて暴れるので危険この上もない。コロ島の収容所では、DDTをあたまからパンツのままで振りかけられシラミを退治してくれた。有難かった。金千円也の持ち帰り金を持って十月の末、佐世保に上陸することができた。舟の中では毎日のように退屈して、のど自慢があった。誰か故郷を思わざるとか、花咲く野辺に日は落ちて……などの歌は何度も毎日のように聞かされたので自然に覚えてしまった。検査がきびしくて沖の海上に十日間も置かれ、皆は大変いらいらした毎日を送った。長崎県の山なみを見た時は、みな甲板に出て、飛びあがって喜ぶ者、涙をふいている者、さまざまだったが、日本の景色が眼に映ったとき、命あってここまでたどりつくことが出来たので心の底から涙を流して喜んだことだったでしょう。真のうれし涙だったでしょう。

執筆者の横顔

羽柴芳太郎氏は、大正二年生まれの八十歳である。名門、県立寒河江中学出身で、同窓の板垣県知事や鈴木貞敏参議院議員を後輩にもつ、よき先輩である。

昭和六年、山形師範を卒業、県内の小学校訓導として教鞭をとっていたが、日本は満蒙開拓を国是と識るや、在満国民教育の重要性を唱え、同十四年、満州国在日大使館に向いて希望したところ、直ちに満州開拓団の国民学校長、兼青年学校長に起用され、同二十年、終戦まで、現地満州住民からも信頼され、民族協和運動の校長として全満にその名を轟かした。

終戦から日本に引き揚げるまでの半死半生の苦闘は「本文」に譲るとして、言語に絶するものがあつた。奇しくも引き揚げて、同二十一年山形県教職に復職して各中学校教諭として勤務、同四十五年に定年退職した。

その後、三年間講師として中学に勤務したことを回顧すれば、三十六年もの長い間、「人に信用される人物たれ」をモットーに情熱を傾けて、教育一筋に生き

貫いてきた。

性格は、正義感強く、温厚で気さくな人柄。私生活は質素で家族思い、一時市会議員に推されたが、本人は、ついで諾しなかった。

公私にわたり信頼され、引揚者団体東根市支部長、兼山形県連理事、遺族会大富地区支部長、老人クラブ大富地区連合会長、その外東根市長の要請をうけ、大富公民館長、東根市老人福祉相談員等々をつとめ公共の奉仕者に徹している。

自家の商店経営は夫人に任せ、幸せ平和な生活、終戦時満州の山野を逃避行中、妻と三人の子供を見失い、単身で引き揚げた断腸の思いを秘めて、妻子の冥福を祈る生涯はいかなるものでもつぐない得ない傷痕の引揚者でありながら、何人にも口外しない識見の持ち主である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

満州国竜江省甘南県太平山村三合屯 三合東三河郷開拓団顛末記

愛知県 瀧川 辰雄

満州国竜江省甘南県太平山村三合屯、三合東三河郷開拓団に対して、昭和二十年八月十四日、召集令状が二十八通、団本部へ届けられた。我が団への最初の召集令状は、昭和十九年頃からの召集令状であり、我が開拓団に対しても全戸数、百四十六戸、老幼婦女子合せて五百有余人、その内、男としては百二十余人で、もう召集されて戦場へ旅立った者が八十余戸であった。

ところが昭和二十年になると、引つ切りなしの召集令状で、どこへ行くともなしに男は消えていくばかりであった。ところが八月十四日には、八月十七日チチハル軍司令部へ入隊すべしという通知が男という男にあり、後に残った男は、十五歳以下と三十九歳以上の